

日本記者クラブ会報

記者研修会

若手、中堅中心に全国から71人

グローバルゼーションとインターネットで、先進国では企業活動としてだけでなく記者活動としても、ジャーナリズムが苦戦を強いられている。中国やインドなど経済発展の著しいところでは、広告収入などの急増で、経営的には元氣なマスメディアも目立つのだが。

先月の記者研修会で、①チャールズ・レイク在日米商工会議所会頭、②作家・井上ひさし、③片山善博前鳥取県知事の話聞いて、ジャーナリズムのサバイバルについて考えた。その際、人間が幸福になるために持っている「欲望」と「理性」という二つのタネを念頭に置いた。

たしかに冷戦後の米国一極支配構造の下で、経済のグローバル化と情報通信技術の飛躍的進歩が、競争と格差を生みながら、かつてない高成長をむらなく世界にもたらしている。

レイクさんはいくつかの具体的な視点からグローバルゼーションの実態を説明した。論理的で説得力を持つプレゼンテーションだった。かれの結論はこうだ。

「自由貿易の拡大・グローバルゼーションは止められない。これに関する経験を最も知っている一人かもしれない自分だが、本当に将来なにが起こるかは分からない。分かっているのは変化し続けるだろうということ。個人としても組織としても、会社も国家も最大限変化に対応する能力を向上させていくことが、グローバルゼーションに生き残る最も効果的なやり方だと思う」

バランスの悪すぎる自転車

大筋はその通りで、各国の政府、議会は社会保障の安定化や再教育支

第451号
2007年
(平成19年)
9月10日発行

〒一〇〇一〇〇一
東京都千代田区内幸町二ノ二
日本プレスセンタービル
◎社団法人 日本記者クラブ
http://www.jnpc.or.jp

援などでも能力が試されるということだろう。ともあれ経済発展は主に「欲望」というタネからの活動だ。この前輪が可能性に満ちすぎて想像に絶するほど肥大化しているのに、「理性」からの行動という後輪はイノベーションなんか関係ないので簡単に大きくなる。そういう自転車で乗っているようなものだ。

井上さんは50年単位の人間の知恵について語った。日本国憲法前文にうたわれている「知恵」についてだ。それが南極条約に生かされて以来、北極、宇宙、海底だけでなく、ラテンアメリカ、南太平洋、アフリカなどの地域にも広がり、いくつもの国際条約に結実した。いまや地球儀の多くの部分が核兵器使用禁止になっており、パリやローマのように、日本でも鎌倉、藤沢、板橋など市や区で無防備都市宣言の動きが広がっている。にもかかわらず、プレスはこういうことを報道しないと、めずらしく率直に不満を表明した。

片山さんはこれまでを総括して「住民自治」という点から見れば地

方分権は進んでいないと、具体的に事例をあげて説明した。途中を省くが、その話から二つのことが分かった。①中央政府・官庁主導の地方分権では「住民自治」にならない。②分権を実現するには、地方議会の質と能力がキーになるので、議会、政党へ優秀な人材が集まるような工夫が肝心だ。

「理性」のタネからの行動

まずは各地の小さな自治体で「住民自治」による分権を実施し、それがよいものだという実感を住民が納得するという形で、足元から民主主義を練り上げないと、分権も空念仏に終わるといふことだろう。

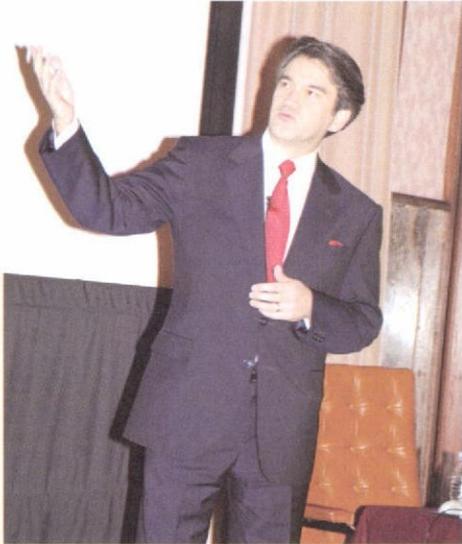
情報産業としてではなく、ジャーナリズムが本来の姿で生き残るにはもつと知恵や理性のタネからの行動にも着目することが大事だろう。いまの政府、議会、行政、司法など公権力への監視役だけでは不十分で、「自治」がより確かな公共圏を形成するために積極的な関心、関与を払うことも重要なのではないだろうか。

散会する研修参加者の背中に声をせずつぶやいた。記者はまず社会的な「一本の考える葦」であってほしい、と。(専務理事 岩崎玄道)

「新聞の人に分かってもらいたい」相田さんはテレビ・ドキュメンタリーの制作手法と制約を熱っぽく語った



「個人も国もコア・バリューを大切にしながら、グローバルゼーションに適応し、活力を得るべきです」とレイクさん 英語はダメなのではと思われるほどのすばらしい日本語だった



あずからしんをたすかん
たすかんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん
あずからしんをたすかん

井上ひさし



「鎌倉からの車中で駅弁を食べてきました」控室で井上さんは揮ごうをしながらおいしそうにブーカブカ

● 知識や知恵を練り上げて
井上ひさし

小さな情報に潜むもの
ロシアの水事情をめぐる数々の短
信記事から、同国が水を重要な戦略
物資と考えているさまが見えてきた
と話され、新聞がばらばらの情報を
集約し、知識や知恵として練り上
げ、提示していくことに期待すると
叱咤激励された。新聞の可能性に言
及された言葉を、私は自戒の念を込
めて聞いていた。

私は、大阪で警察取材を長く続け
ているが、実は最近、警察や地方の
検察庁による証券犯罪の摘発が続い

● 「真実」を伝えるための演出
相田 洋

深い取材力と逃げない姿勢
映像ジャーナリズムは、カメラや
照明など「道具」に縛られる宿命を
負う。そこが活字ジャーナリズムと
の最大の違いだ、と相田さんは言
う。こうしたドキュメンタリー制作
の現実がNHKスペシャル「マネー
革命」のメイキングビデオからかい
ま見えた。照明技術で再現された会
議室の二十四時間、渡る取材対象者
を「そこを何とか」と説得しながら、
意図した映像にはめ込んでいく粘り
強さ。「真実を伝えるための演出

ている。これまでにはあまりなかつ
たことだ。ベタ記事からは、個人投
資家のモラル低下が読み取れるのだ
が、それ以上に、証券監視当局が個
人の株取引の監視を強めている事実
が浮かび上がる。公正な市場ルール
の確保はもちろん大切だが、個人投
資家を萎縮させないだろうか。小さ
な情報のなかに潜む権力の思惑
——。それを見落としては、読者の
望む新聞にはなれないと教えられた
90分だった。

読売新聞大阪本社社会部
渕上俊介

は必要だ」。数多くの名作をものに
してきた敏腕ディレクターの率直な
語りに引き込まれた。
演出はどこまで許容されるのか。
同じビデオを見た大学生の賛否は半々
だったという。しかし相田さんは
「何のためか、誰かが傷つかないか、
ねつ造ではないか、これらが説明で
きるなら積極的に使う。そこから逃
げては何も伝わらない」と断言した。
道具に制約されない活字メディアこ
そ深い取材力と逃げない姿勢を、と
いうメッセージにも聞こえた。
神戸新聞東京支社編集部
勝沼直子

8月23日(木)

- ◇11:00~12:30 研究会「テレビの取材と表現～体験的映像ジャーナリスト論」
相田洋 元NHKエグゼクティブ・ディレクター
- ◇13:00~14:30 昼食会「読者の望む新聞」
井上ひさし氏
- ◇15:00~16:30 研究会「地方分権とは何か～国と地方との関係」
片山善博 慶大教授(前鳥取県知事)
- ◇17:00~18:30 懇親会

8月24日(金)

- ◇10:00~11:30 研究会「持続可能な経済成長の実現に向けて/私のメディア体験」
チャールズ・レイク在日米商工会議所(ACJ)会頭(アフラック副会長)
- ◇12:00~13:30 昼食会
唐沢祥人 日本医師会会長
- ◇14:00~15:30 研究会「自殺報道を考える」
高橋祥友 防衛医科大学教授
- ◇16:00~17:00 研究会「放送倫理検証委員会設立の経緯と概要」
三好晴海 民放連番組部長

<参加>42社71人(新聞・通信23社46人 放送19社25人)



「住民自治」なくして地方分権なしという片山さん 入閣の話は？との質問には「気配もありません」と一言



研究会では次々と質問が出た

● グローバル化の活力

チャールズ・レイク

● 強者だけでない「相利共生」

「国家も企業もグローバル化の活力を取り込む戦略が重要となる」。レイク氏は、雇用創出や競争が生み出す成長力などグローバル化のメリットを強調した。その上で、自由貿易協定(FTA)の締結を視野に、日米のさらなる関係強化を提唱した。確かに利点はある。が、国内に目を向けると、グローバル化に対する不安や「外資脅威論」が渦巻いている。戦後最長の景気拡大とされながら、足取りは重い。中央と地方、大

● 地方分権は進んでいるか

片山善博

まやかしにだまされない
「皮肉を込めてこのタイトルにしました」。講師の片山善博・慶大大学院教授は鳥取県知事時代に「改革派」として知られた人。

その経験を踏まえて広範にしかもよく整理して話を進めてくれたが、マスコミに携わる者にとっては耳が痛い内容でもあった。

地方分権改革をめぐるこれまでの経過と今後の課題に分けて話したが、最近の動きについての片山教授の採点はかなり厳しい。聴いた限り

企業と中小企業の格差も広がる。そんな日本経済の実態が先行きの不透明感を増幅させていると感じる。

レイク氏によると、格差社会の代表格とされる米国内でも賛否の議論があるという。「グローバルか、クローズか。日米両国は大きな選択を迫られている」と指摘した。

在日米商工会議所はスローガンに「相利共生」を掲げる。その対象が日米の強者同士だけではなく、全体に浸透するものなのか。レイク氏の視座も踏まえ、地域からしっかりと見極めたい。

中国新聞経済・商工会担当 金刺大五

では、ほとんど0点に近いのではな
いだろうか。マイナスもあるほどだ。

人間に例えれば「成年後見制度」によって国に支えられ、独力では借金もできない存在だと言う。権限移譲は何も進まず、通達行政は健在、税財源見直しのいわゆる「三位一体」改革は骨抜き……。地方自治の現場にいたからこそ、あえて手厳しい言い回しをしたのだろう。

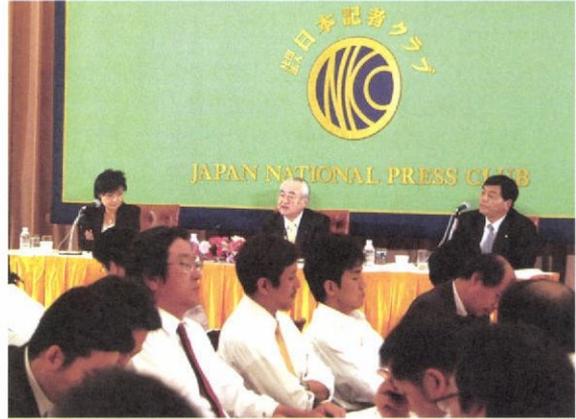
政治家も含めだれもが地方分権の時代を訴える。まやかしのフレーズだと、気を引き締めないといけない。

河北新報論説委員

早川俊哉



懇親会でEU駐日代表部の広報・コフラーさん（左）と末常さん（右）と交流する参加者



会員と共に唐沢・日本医師会会長の昼食会にも参加「クラブゲスト」（9ページ）に関連記事



「放送倫理検証委員会」立ち上げの経緯や主な機能を説明した民放連の三好部長

いじめ・自殺報道のあり方への関心は高く、終了後も高橋教授（左）を囲む



● 予防重視の自殺報道を

高橋祥友

抑止力持つ報道とは

高橋教授はマスメディアによる自殺報道について、より予防に重点を置いた報道の必要性を訴えた。

自殺報道、とりわけ教育現場で起きる中高生の自殺や、ネットを介した複数の若者による自殺は、意外性もあり大きく報道される。

高橋教授は過去の研究をもとに報道の仕方次第では、報道が群発自殺の引き金になりかねないと警鐘も鳴らした。

取材する側として、当事者周辺を

● 第三者性の強い倫理検証委

三好晴海

影響力の大きさ自覚と自戒
視聴者と信頼で結ばれた「テレビ」を将来に残すため、BPOには、今後も第三者性を強め、「放送局の監視役」としての認識を視聴者から得ることが求められると思う。

放送局が策定した再発防止策と、それに対して委員会が付した意見を視聴者に公表するなど、放送倫理検証委員会には第三者性の強いスキームが存在することを、この研究会で知った。

一方で、三好晴海民放連番組部長

取材・記事化することで、同じ被害を出すまいとの思いはある。だが、自殺原因が「いじめ」などに短絡化され、単発で終わる今の自殺報道に抑止力があるか、多くの記者は疑問も感じていると思う。

研究会では、予防を重視したWHOによる自殺報道に関する提言なども紹介された。提言などを参考に、本当の抑止力を持つ自殺報道のあり方を考える、貴重な勉強の機会になった。

毎日新聞青森支局

村松 洋

は、BPOが資金面でNHKと民放各社によって支えられている点に触れ、「一般視聴者からどのような印象を持たれているかが気になる」とも話していた。

放送局独自の監視機関として、BPOが視聴者から認識と信頼を得るには、今後も厳しく、より客観的に放送内容をチェックする必要があると思った。

また、放送局で働く私自身も、「テレビ」の影響力を自覚し、放送倫理について積極的に考えていくことが大切だとあらためて感じた。

中京テレビ放送報道部 野口浩之

戒めと報道のヒント

事件事故の毎日から少し逃避させてもらい東京へ。いきなり海外ロケ地でクレイン、凝った照明、潤沢なスタッフによるドキュメンタリー撮影現場の話で、民放ローカル局員として多大な羨望を覚えつつ、将来に制作する番組で盗んでやろう、と目に耳に焼き付ける。

ローカル局は、雑草の時代である。井上ひさしさんの言葉が、心にしみた。「優しさ」を忘れた日本の若い世代への戒めと報道のヒントに溢れていた。特に日中国交正常化でみせた周恩来の話は、中国国籍の妻に聞かせたかった。

北海道文化放送報道部 小田 学

デスクも一線記者も

一線の記者を離れてデスク稼業に就き2年目に入った。参加して気付き、学んだことが多くあった。初日は井上氏の示唆に富んだ話を楽しみ、片山氏には地方で報道に当たる私にとって国とのかかわり方という、ともすると忘れがちな、しかし重要な視点を再認識させていただいた。2日目、高橋氏の自殺報道に関する講演での資料は、一線の記者に配布して取材に当たる上で役立ててもらい方もいい。デスクも記者同様、日々悩み勉強している。今回学んだことを社内でも共有できるように努めたい。

福島民報報道部副部長 佐久間敏徳

時代をえぐる

熱心な新聞読者であるという井上ひさし氏の言葉が強く印象に残った。新聞記事にマーケティングはいらない。読者が紙面を開き「私はこんな記事が読みたかったんだ」と、ひざを打つような記事こそが必要。それが時代をえぐる記者本来の仕事だと痛感した。片山氏の地方分権論解説は明快で、相田氏が示した映像現場の裏側は深かった。各講師の講演自体が、井上氏も強調した「むずかしいことをやさしく」「やさしいことをふかく」という基本を実践している。入社7年目。凝り固まった思考が大いに刺激を受けた。

千葉日報社会部 高橋律孝

ラジオの力信じて

ラジオ局就職以来取材先ですっと感じていること、「ラジオはコウモリ」。テレビの人には別物扱いされ、ペンの人からは電波でテレビと一括り。居心地の悪さを感じてきた。研修会に参加して、こんなことを考えていた自分が恥ずかしかった。方法の違いはあれ、伝える、この一点をいかに突き詰めるかこそ考えるべきと思ひ知らされた。人手不足から報道の仕事に専念できない状況を憂うことなく、ラジオらしい報道を追求しようという決意と勇気をもたらした得難い2日間だった。

東海ラジオ放送報道部 村上和宏

活字とテレビの手法

相田氏は「活字とテレビは手法が違う」と語ったが、私も日々それを感じながら仕事をしている。というのも今、写真と動画の双方を担当しているからだ。特に撮影と編集作業は、想像以上に時間がかかる。視聴者により正しく、分かりやすく伝えるため、演出ともとれる手法を用いていることが分かった。新聞と放送は違うとはいえ、写真も動画も事実を映し出すのに変わりはない。事実をどう伝えるべきなのか、「事実」とは何か、「真実」とは何か、あらためて考えるきっかけとなり有意義だった。

愛媛新聞映像報道部 酒井俊宏

書くことへの姿勢

「むずかしいことをやさしく。やさしいことをふかく。ふかいことをゆかいに。ゆかいなことをまじめに書くこと」。井上ひさしさんが指摘した書くことへの姿勢は、頭では理解できても実際には難しい。「むずかしいことをやさしく」は何とかなりそうだが、それから先は自信がない。ふり返って、長い記者生活の中で納得のいく文章が書けていたか。自省の念にとらわれた。「新聞は知識、知恵に当たる部分を書くべき」。前述の指摘と合わせ、この課題ともどう向き合えるか。大変な宿題を与えられた。

山陰中央新報論説委員 野村 剛

多彩な講師陣

私は2度目の参加だった。前回に比べると講師陣も多彩な顔ぶれで、とても興味深い内容だった。片山氏の話は、地方自治体・議会の実情について歯に衣着せぬ、キレのある話ぶりで実に納得できるものだった。自殺報道は、実際にいじめ自殺が相次いだ時期ならではのタイムリーなテーマで、報道のあり方について考えさせられた。懇親会は、各国大使館の人たちとの交流会も兼ねていたが、地方記者にとってはちよつと縁遠い存在の方たちで、前回のような各社のOBとの交流の方がよかったです。

TVQ九州放送報道部 杉本尚文

中央の生の声

市町村合併など中央主導が進む改革で、大分県では様々な格差が広がっている。地方紙の記者として、その実情を取材する機会はいが、格差を招いた。中央の考え方を直接取材できる機会はありません。その意味で地方分権、医師の偏在など地方に大きく関係する問題について、分権のキーマンや日本医師会トップの生の声を聞けたことは、参考になった。活字と映像メディアの融合がいわれる中、元NHK相田洋さんの映像表現などテレビの話も興味深かった。

大分合同新聞社会部 糸永健太郎

「水上勉父子再会」を書くまで



岩垂 弘

「ドラマがドラマを生むといわれるけれど、これもそういうことだろうか」

6月24日から7月15日にかけて朝日新聞に4回にわたって連載された『家族 無言の記憶』（筆者は宮地ゆう記者）を読み終えた時、私の脳裏をよぎったのは、そういう感慨であった。

これは、戦没画学生の絵を集めた美術館「無言館」（長野県上田市）の館主、窪島誠一郎氏の父親捜しと、父と出会った後に窪島氏の家族に起きたことを描いたドキュメンタリーである。

私がこの連載をひときり感慨深く読み続けたのはわけがあった。というの、ちょうど30年前に窪島氏の父親捜しと父親との再会を記事にしたからだ。

1977年7月のある日、帰宅すると、妻がいつになくそわそわしている。「何かあったのか」と尋ねると、「話しちゃおうかしら」と、意外な返事。それでもなおしばらく決断がつかないらしく、もじもじしていたが、思い切って言っちゃおうといった風情でこう言った。「窪島さんが見つけていたお父さんが見つかったんだって」

窪島さんとは、窪島誠一郎氏。2年ほど前からわが家をたびたび訪れていた、東京・世田谷区成城に住む画廊経営者だった。わが家では、戦後、「抵抗の画家」とか「異端の画家」と評価されるようになった鬚光（あのみつ。本名・石村日郎）の妻で、私の義母にあたる石村キエが、私たちと一緒に暮らしていたからである。私はそれまで窪島氏と話を交わ

したことはなかったが、義母らの話から、窪島氏が幼いころ別れた父を捜していたことは知っていた。

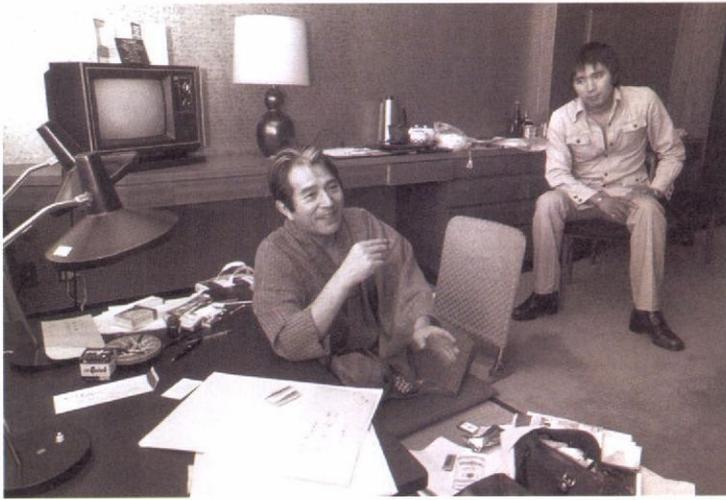
「そりや良かった。で、見つかった父親はどんな人」と私がたまたま聞くと、妻は言った。「水上勉さんだって、作家の」

●：書きたい気持ち抑えて

仰天して「これは大ニュースだ」と口走った私に妻は続けた。「窪島さんは私たちに口止めしたの。自分としてはこのことを世間に明らかにしたくない。岩垂さんは新聞記者だから、彼には黙っていてほしい」と。窪島氏が妻と義母に思わず口をすべらせたのは、長年にわたって父を捜し続け、ついにめぐりあえたことがよほどうれしかったからにちがいない、と私はその時、思った。

私は窪島氏を訪ね、取材させてほしいと頼んだ。が、窪島氏は「相手のあることだし、その人の社会的地位も考えなくてはならないから」と固辞し続けた。やむなく、私は「書かない」を条件に話を聞いた。だから、メモはいっさい取らなかった。窪島氏と別れた後、私は喫茶店に飛び込み、記憶していたことを一気にメモ帳に書き留めた。

窪島氏によると、13、14歳のころ、自分が両親に似ていないことに気づいた。それから20余年にわたって真の父親捜しが続くのだが、1977年6月、ついに父親にたどりつき、父子は30余年ぶりに再会する。その経緯は記事で書いたから、ここでは省くが、話を聞いて私は興奮した。捜しあてた父親が水上勉氏だったからだけではない。窪島氏が水上作品の熱心な愛読者だったことだ。とりわけ水上氏の代表作『飢餓海峡』に出てくる、北海道の雷電岬の描写に感激した窪島氏は現地を訪ね、その光景に魅せられて詩をつくり、その詩集に『雷電』と名づけたほど。それに、窪島氏の結婚相手は、なんと雷電海岸の出身だった。そればかりでない。窪島氏の家は、水上氏の邸宅から歩いて5分とかからないところ。互いに父子と知らな



1977年8月4日付朝日新聞に載った「父子再会」の写真 右が窪島誠一郎氏 撮影は中井征勝写真部員（朝日新聞社提供）

いまま、父子は同じ町内に住んでいたのである。

「なんとドラマチックな物語に、私は「事実より小説よりも奇なり」と思わざるをえなかった。しかし、これが記事にできないのだ。残念極まりなかったが、約束は約束、沈黙するほかなかった。ところが、である。7月末、窪島氏から「書いてもらってもかまわない」と連絡があった。ある新聞が察知して取材を始めたからで、「どうせ書かれるなら、あな

たに書いてもらいたい」とのこと。ただし、「水上氏の了解をとってほしい」という。

…署名記事を条件に

私と中井征勝写真部員は窪島氏とともに、ホテルオークラで仕事中的水上氏を訪ねた。が、水上氏は、頑として報道されることを拒んだ。「いまの妻子にまだ話してない。書かれれば、報道陣が押しかけ、シヨックを受けるだろう」「社会面で切り刻まれるのは耐え難い。学芸面か雑誌でたっぷりと書いてもらえるのだったら、まだ我慢できるが」「雑報スタイルで報じられると、ぼくらから売れ込んだと思われ。そう思われたくない」。貧乏作家時代、生活苦からその養育を他人に頼らざるをえなかった、まだ幼かった長男。その長男との再会をスキャンダラスに報じられることを恐れているように私には思われた。

私は「著名人のスキャンダラスとして取りあげるのではない」と粘ったが、

水上氏は「やはりやめてほしい」の一点張り。さらに粘ると、「新聞社の責任者と話したい」という。

そこで、私は伊藤邦男・社会部長と二人で再びホテルにおもむいた。部長からの懇請に水上氏もついに条件付きで掲載をOKしたが、その条件とは「ぼくから新聞社に売り込んだのではない、とわかるような記事にすること。それには、筆者名を明記し、筆者がなぜこの記事を書いたか自ら明らかにすること」というものだった。

かくして、私の原稿は8月4日付の朝日新聞朝刊に載った。「捜しあてた父は水上勉氏」「孤児の一念」が躍っていた。末尾には「窪島さんは（こんどのことが）人びとに知られることをおそれていたが、私はあえて社会に明らかにする道を選んだ。いまなお、戦争直後に離れ離れになった肉親を捜している人びとに、一つの希望を与えることになるのでは、と思ったからである」と私の署名入り一文がつけられていた。

…追わなかった「その後」

私はこのニュースの「その後」をあえて追わなかった。「公表されたくない」という水上父子の心情に接

し、後追いない方がいい、と考えたからだ。だから、宮地記者の『家族 無言の記憶』で、窪島氏の実母が自ら命を絶っていたことを初めて知り、衝撃を受けた。なぜ自殺したのか、私にはうかがい知れなかったが、自分がかつて書いたドラマの意外な展開に言葉を失った。

鰐光生誕100年を記念する「鰐光展」がこの春、毎日新聞社の主催で東京国立近代美術館で開催された。それを記念して劇団文化座が、鰐光が主人公の芝居『眼のある風景―夢しぐれ東長崎バイフォー寮―』を都内で上演した。原作は窪島氏。その打ち上げの席で、私は久しぶりに窪島氏に会った。互いに「30年前のこと」には触れなかったが、私は、窪島氏と私とを連綿と結ぶ不思議な因縁の糸とも言うべきものの存在を感じていた。

なお、宮地記者の連載につけられた写真は、30年前に水上父子ツーショットを撮った中井征勝・元写真部員の作品である。

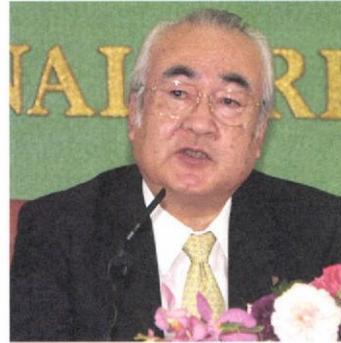
いわだれ・ひろし会員 1935年
長野県生まれ 58年朝日新聞入社
社会部員 首都部次長 社会部次長
編集委員など 95年退社 現在 平
和・協同ジャーナリスト基金代表運
営委員

唐沢 祥人 日本医師会会長

8・24(金) 昼食会 司会 藤延直道理事
飯野会津子委員 出席 139人

▼国民皆保険を脅かす5つの危機

小泉政権時代に加速した医療費抑制政策に何とか歯止めをかけようと、日本医師会はさまざまな提言を打ち出している。しかし、さきの参院選では日医の政治団体である日本医師連盟推薦の候補が落選し、痛打をあげた。



「無過失補償制度の制定や夜間の開業医による小児救急への対応などに力を注いできた」という。

三つ目が高齢化。75歳以上の3人に1人が独居か老老世帯になっている。「厚労省は12年度に医療療養病床を15万床まで減らす方針だが、医療・介護難民を出さないためには26万床は要る。在宅医療への移行は徐々にすべきだ」。

「医師の利益だけのために活動している団体という誤解がある。いくつもの中学・高校教科書に圧力団体の例として日医の名が出ている」と、唐沢氏は世間に流布しているイメージを払拭する必要性を強調する。

組織目標は「みな平等に医療を受けることができる国民皆保険制度の維持」。その実現を脅かす5つの危機をあげた。

まず二つの医師不足。お産を受け入れる医療機関が96年と05年を比べると27%減った。小児科を掲げる施設も減少傾向が続いている。過重労働のうえに、事故が起きると裁判になるケースが多発しているからだ。

「無過失補償制度の制定や夜間の開業医による小児救急への対応などに力を注いできた」という。

三つ目が高齢化。75歳以上の3人に1人が独居か老老世帯になっている。「厚労省は12年度に医療療養病床を15万床まで減らす方針だが、医療・介護難民を出さないためには26万床は要る。在宅医療への移行は徐々にすべきだ」。

残る二つは世界水準との比較。日本のGDPに占める総医療支出の割合はOECD30カ国中18位。トップの米国の半分だ。人口1000人あたりの医師数はさらに下がって27位。「米国も金のない人には非常に過酷な国。5000万人近い無保険者がいる。日本の制度や予算にむだがないかを徹底的に見直したうえで、財源を消費税引き上げに求めることもある」。参院選の自民大敗でだれもが口が重い消費税に踏み込んだ発言をした。

朝日新聞医療エディター

渥美 好司

徳川 恒孝 徳川記念財団理事長

8・27(月) 著者と語る
司会 長沢光男委員 出席 76人

▼縦横の江戸時代論議

4年前の江戸開府400年をきっかけに始まった「江戸ブーム」は、資源の有限性と環境保全に目覚めた世上の「エコブーム」にも乗って止まる所を知らず、徳川宗家の徳川恒孝(つねなり)さんがこの春書かれた「江戸の遺伝子 いまこそ見直されるべき日本人の知恵」(PHP研究所刊)も、刊行以来夏までに6刷を重ねている、と言う訳でこのほどクラブゲストに招かれた徳川さんだが、江戸を語るのにこの人ほどふさわしい御仁もあるまい。何しろ徳川18代目のご当主なのだから。



「ご本の方は江戸の「本家本元」としてだけでなく、日本郵船勤務時代の海外体験を踏まえた国際的、世界的視野に立つ縦横の江戸時代論議で、大らかな中にも巧まざるユーモアと風刺

の利いた筆遣いで読ませるが、講演の語り口は「学習院ボーイ」らしく東京人独特のやや早口。

冒頭に如才なく理事長を務める徳川記念財団のPRもなさったが、本で述べた持論の中でも、士農工商の「封建的身分制度」の下での、世界に誇るべき教育制度の多様性と充実(武士の藩校、町人子弟の寺子屋と奉公制度、成人向けの私塾等々)、支配階級である武家の法治主義・能力主義・あるべき指導者像の尊重、それ故に武家は道義的に権力を保ち得たが、それ故にまた窮乏し、経済力は町民に移行したという、外国人には理解し難い史上稀な「ねじれ現象」、リサイクルと省エネで資源(自然)と人間のバランスを保った江戸社会の知恵を特に指摘。

その上で、手遅れにならぬうちに、こうした「日本らしさ」を表に出し、自信を持って日本型組織による経済社会、自然との共生社会を作って行くことが本場の国際貢献であるとうと結んだ。260年の泰平を画した「鎖国」と「開国」のタイムミン

グも絶妙な外交知見であったと。

東京新聞出身 高橋 正

江田 五月 参院議長

8・30(木) 昼食会 司会 宇治敏彦副
理事長 田崎史郎委員 出席 14人

▼もうカーボン・コピーとは言わせない

自らも激戦区で陣頭指揮をとった参院選の大勝で、55年体制以降初めて野党が奪った参院議長に座した。77年に亡父三郎氏の遺志を継ぎ政界入りして30年。日焼けの跡が残る江田氏の表情からは、節目の年に重責に就いた感慨が感じられた。

話題は、終始、衆参のねじれという新たな政治状況の中で、いかに日本の民主主義を前進させるかという「江田五月の民主主義論」だった。

「日本の二院制が機能するか、失敗するかが問われる」と野党が十分議論すべきだと強調した。民主主義の5原則として①情報共有②公開討論③相互浸透④多数決原理⑤少数意見尊重をあげ、とりわけ「野党が与



党と対等の情報を共有することが大事」と国政調査権の発動に積極姿勢を見せた。

「議長の立場を離れて言うが」という前置きだったが「野党多数の下、参院先議の議員立法が増える。野党が政権をとればこういう法案が出る」と国民に見せていくのではないかと「民主党はまだお試し期間。数にものを言わせて議長の意向をねじ伏せることにはならないと思う」などと、臨時国会に向けた民主党の戦略の一端を垣間見せた。

「両院協議会を秘密会にせず公開の討論にできないか」「選挙制度改革の問題は避けて通れない」。野党出身の議長として取り組みたい課題は饒舌に語ったが、小沢民主党代表の人物評の質問には「切れ味の良さよりも存在感で勝負しているのは正解だ」と抽象的。もう一つ歯切れが悪かった。

衆参がねじれたことで、異なる二つの民意がぶつかることもあり得る。だがそこからエネルギーが生まれるはずと江田氏は指摘した。「もう衆院のカーボンコピーなどと言わせない」という言葉には、参院側から政治を変えていくのだという強い意欲が感じられた。

NHK解説委員

城本 勝

ワシントンのオアシス
ニューマンの軌跡をたどって

●伊藤 三郎

この7月中旬の1週間、米国の首都ワシントンDCに滞在。議会図書館とナショナル・プレス・クラブ(NPC)に通った。いずれも元NY・ヘラルド・トリビューン(ヘラトリ)紙東京特派員、ジョセフ・ニューマン(1995年没)の軌跡をたどるのが

目的だった。

彼は「太平洋戦争」開戦前の東京で、ゾルゲ・グループを情報源にスクープを連発。開戦直前に帰国して軍国主義下の日本を活写した『GOODBYE JAPAN』を出版。筆者はその半世紀後、ワシントンで偶然彼にあったことから、新たな解説を共同で書き加えた日本語復刻版を刊行。その機会に彼を日本に招き、当クラブでも懇談会を催した(94年)ので、あるいはご記憶の方も。

果たしてその「グッバイ・ジャパン」復刻版が所蔵されているか、またニューマンは日本脱出直前までどんな原稿を1の2点を調べる図書館に通い、ジョージタウンのホテルから地下鉄の1週間切符(22ドル)で5

日間。国会議事堂に隣接し収蔵印刷物約2900万点という世界最大の図書館の懐は深かった。

初日、まずは復刻版「グッバイ・ジャパン」の収蔵を確認した後「私はその共著者ですが、閲覧できますか」と尋ねるや「ウワオー、ホンモノの著者？ わざわざ東京から！」と窓口の女性スタッフが嬌声を発し、熱い抱擁で歓迎してくれた。

本館の超豪華な閲覧室でその復刻版と対面のは、道路を隔てた別館の新聞閲覧室で、1941年当時の「ヘラトリ」紙を連日マイクロフィルムで点検。専用の机と書棚を当てがわれ、予想以上の成果を得た。

もう一つ、筆者がニューマン・インタビューを繰り返した90年代初め、彼が何度も招いてくれた米記者クラブ。当日本記者クラブと提携関係にあるが、念のためにと用意してくれたクラブの紹介状が何かと便利した。臨時メンバー証を難なく受け取り、記者会見もフリーだったし、レストランでも歓迎された。料理の質、サービス、雰囲気どれを取ってもDC滞在中のベスト。図書館とともに真夏の首都のオアシスだったことを、クラブ事務局への謝意と共に、参考までにお知らせします。

(朝日新聞出身)

グローバリゼーションとメディア

プリントされた新聞を読む人が少なくなつて、リアルタイムでインターネットを使い情報をとる。ブログその他で、自称・ジャーナリストたちがどの組織にも所属せずドンドン発信する▼そういう時代において、

メディアがどう経営戦略を展開するかも大きな課題になっている。そのなかで記者の仕事は今後どう変わっていくのか。経営と共に一人のプロフェッショナルとしての記者もチャレンジを受けている▼WSJの経営幹部との話を思い出しながら語った

レイクさん(在日米商工会議所会頭)。母の国・日本で義務教育を終えた後、父の国・米国の高校、大学へ。大学院のとき、文部省の国費留学生として「国会の政策形成」研究のため来日。記者の夜回りにも同行して、ジャーナリストと政治家のびつ

くりするような会話も見聞した。オープンな記者たちから「永田町の論理」や「あうんの呼吸」も教わった▼後年、USTRを代表して大蔵省と交渉し、記者クラブでブリーフィングしてまたびつくり。大蔵より大蔵的な立場からの挑戦を受けた、と。(玄)

リレー エッセー

佐藤番①



佐藤栄作首相は、1966年12月1日に、自民党総裁選で再選された。奇しくも同じ日に、私は政治部に配属され、政治記者としての初日から「佐藤番」を担当させられた。

この日の党大会は、午前9時、日比谷公会堂で開会の予定だったが、大会会場が停電となり、開会が大幅に遅れた。佐藤内閣は、この当時、黒い霧につつまれていて、内閣支持率も25%までに落ち込んでいた。それだけに、内閣を象徴するかのような停電だった。午前11時45分に投票結果が発表さ

れ、投票総数は459票、佐藤首相は、289票を得て、藤山愛一郎氏らをおさえ、自民党総裁に再選された。総裁選直後に、首相公邸で開かれた祝賀パーティーで、佐藤首相は「きれいな総裁選挙だった。これは粛党の第一歩だ。批判票が出るのは当然のことだ、民主主義のあらわれであ

で私邸に入った。佐藤首相は、9時30分私邸を出発、同55分首相官邸着。閣議で閣僚の辞表を取りまとめ、改造人事に着手。前尾繁三郎氏が入閣要請を断ったのが印象的だった。12月27日に通常国会が召集され、佐藤首相は冒頭に衆議院を解散し

り方では、交通事情から事故につながるおそれがあったからだ。この日以降は、共同・時事の2社のみが、追っかけを続け、各社に情報を提供し、それぞれの現場で「佐藤番」の仕事は続いた。佐藤首相は7月13日、「佐藤番総会」に出席し、約80人の各社の記者を前に、「追っかけがなくなつて、一番さびしくなるのは、私より妻です」と、ユーモアたっぷりに挨拶。寛子夫人と一緒に退席された。

人脈が支えた長期政権

り、喜ばしい。挙党体制で協力してほしい」と挨拶。

翌12月2日も「佐藤番」だった。午前7時25分に、世田谷の首相私邸に着き、私邸に出入りする方々取材して、デスクや関係方面に報告する仕事が続いた。午前7時54分に、橋本龍太郎、小淵恵三氏らが相次い

岡 景義

た。黒い霧解散。ともいわれ、年末年始の総選挙に入った。

は、宮中で記帳したあと、自民党本部で名刺交換会に出席。その後、大磯の吉田茂氏に新年の挨拶。鎌倉の「前田別邸」へ。記者団も鎌倉に同行した。

このような、新聞、通信、放送各社が一体となって首相に同行取材する「佐藤番」は、7月10日で終了した。各社が首相の車を追いかけるや

結局、佐藤政権は、7年8カ月、2797日に及ぶ史上第一の長期政権となった。田中角栄氏をはじめとする佐藤首相の人脈が長期政権を支えたといえよう。

(おか・かげよし 元読売新聞政治部 現・テレビ信州取締役相談役)

*このシリーズは「総理番・佐藤首相」をキーワードにバトンをつなぎます。

●アジア3カ国歴訪

安倍首相の再チャレンジ

▼中澤 雄大
(毎日新聞社)

8月19〜25日にかけてアジア3カ国を歴訪した安倍晋三首相。参院選惨敗ショックをひきずった「憔悴の旅」になるという事前の予想を覆そうと、「力強い外交」の演出に腐心し、是が非でも政権を維持するという「開き直り」にも似た、強い意志が垣間見えた外遊だった。

りやめる選択肢はなかった」（外務省幹部）。むしろ「私の基本路線は国民の理解を得ている」と続投を決断しただけに、反転攻勢をかける契機にしたいとの思惑が日程の随所に表れていた。

■主張する外交にこだわる

「おちおち外遊をしている場合か。敗因を分析して内政を立て直すべきだ」。こうした声が永田町界隈から少なからず聞こえたが、首相に「取

例えば、期間中2度行われた演説がある。設立40周年を迎えた東南アジア諸国連合（ASEAN）と日本の関係をうたったジャカルタでの演説では「思いやりと分かち合いの精神」を強調し、対ASEAN政策の機軸である77年の福田起夫首相（当時）の「福田ドクトリン」の発展・継承を目指した。



最初の訪問国インドネシアに到着した首相夫妻（8.19）＝共同通信社提供

同時にそれは、福田元首相の長男で元官房長官の福田康夫氏

を強く意識したものと受け止められた。昨夏、同じジャカルタで「アジア重視」の演説をした福田氏が「ポスト安倍」の有力候補と目されるだけに、アジア重視は福田氏だけの政策にさせてはおかないという強烈なライバル心をのぞかせた、と首相周辺は解説する。安倍包囲網の芽は早めに摘むに限るというわけだ。

日本の首相として3人目のインド国会での演説では「拡大アジア」という新概念を提唱した。基本的価値観を共有する日米豪印の連携強化を主張したことについて、一部のインド紙が「アジア版NATO（北大西洋条約機構）」と揶揄したほど「主張する外交」にこだわった。

いずれの演説でも、日本の首相としてインドやインドネシアを初訪問した祖父・岸信介元首相への思慕を強く感じさせた。インド側もこうした首相の思いを先刻承知で、夕食会の際にシン首相から50年前に訪印した岸氏の写真アルバムが突然贈られる場面もあった。

ハイライトは、やはり極東国際軍事裁判（東京裁判）の故パール判事の長男（81）との面会だ。元A級戦犯容疑者の岸氏と判事の交流は知られるが、中国、韓国の反発も予想された。しかし、周囲の心配をよそに

安倍首相は「お父様は今でも多くの日本人の尊敬を集めている」と敬意を示した。これは歴史認識などで「安倍カラー」を国内保守層にアピールすると同時に、帰国後の政局を控えて数々の難局に遭った祖父の威光にあやかりたいようにも映った。

■内政懇では声落とす

ただ、こうした強気の姿勢が影を潜めた場面があった。一連の外交日程が終了した24日夜の記者団との懇談。「外遊に出るに際し、基本的な人事構想は、考えを、まとめた」と、言ってもいいですね。声のトーンを落とした安倍首相は左手を頬（ほお）に一言一言、慎重に言葉を選んだ。「暇さえあると日本と連絡を取っていた」（同行筋）といい、実際は、外遊中も、帰国後の内閣改造で頭の中はいっぱいだったようだ。

「美しい国づくり、改革を再スタートさせるために内閣改造を行いました」。27日夜の改造後の会見で、安倍首相は改めて基本路線の継続を強調した。3カ国歴訪の旅は、もう後がない自らが「再チャレンジ」するための布石だったのだろう。

なかざわ・ゆうだい 1990年入社 西
部報道部などを経て 政治部 07年春から
外務省 防衛省担当

● バグダッド

「恐怖」の無秩序社会

▼ 齊藤 憲寛
(日本放送協会)

真夏のバグダッドには灼熱の太陽が照りつけ、乾いた砂塵まじりの熱風が吹き渡り、気温は50度を超える。街には氷売りやヤシの葉を編んだうちわ売りが登場する。

そんな環境の中で、電力は1日に数時間しか供給されない。武装勢力による電力施設の攻撃が主な原因とされる。このため廃車のエンジンを改造した小型の発電機を購入して使っている家庭もある。発電機が買えない貧しい人たちは、そこから電気を分けてもらう。夜は家の屋上で寝る人も多い。

「今のイラクの雰囲気のひとつとして表現するなら、それは『恐怖』だ」。7月にバグダッド駐在のクロッカー米大使は正しくもこう言った。

■ 爆弾テロ車1台5000ドル

すさまじい爆弾テロは報道されているとおり。自爆もあれば遠隔操作の爆弾もある。厳しい警備が敷かれ

る官庁街、「グリーンゾーン」にも時おり迫撃砲弾が飛んでくる。また対立する宗派の人たちを殺害するための、あるいは身代金目当ての拉致・誘拐は日常のできごとだ。公式の統計はないが、NGOによれば、この半年で警察に届け出がなされただけで2万件に上る。

通信省の運転手は、女性幹部職員を自宅に送る途中、警察官の服装をした武装団に拉致され暴行された。「せめて娘に1度会わせてから殺せ」と叫んだ。2万ドルを要求され、持っている土地を売って1万ドルを払い、手錠のまま解放された。バグダッド有数の電気工事会社の経営者は2回にわたって誘拐され、計4万ドルの身代金を支払わされた。嫌気がさして、比較的治安がよい北部のクルド自治区に移住して商売を再開した。身代金が武装勢力の資金源になっているという指摘もある。「爆弾テロ車1台を用意するのに5000ドル

ル。ギャング連中が稼ぐ方法は誘拐以外にない」とイラク人の新聞記者は言った。公権力の不在で、ならず者が跳梁跋扈しているのだ。イラクの人口の7分の1にあたる400万人以上が、危険を避けて住んでいた家を離れ、うち200万人は隣国のヨルダンなど国外に脱出している。

増派された米軍は、バグダッド周辺で、イスラム教スンニ派の武装勢力「イラクのアルカイダ」やシーア派の民兵組織を無力化するため、激しい掃討作戦を続けている。このため武装勢力の一部が北部に移動し、バグダッドではこの夏、爆弾テロが多少収まったようだ。

しかしこうした「一定の前進」を維持し、さらに拡大できるかは米軍自身が認める課題である。8月14日には北西部の宗教的少数派、ヤジードイ教徒の集落が自爆テロの標的にされ、イラク戦争が始まって以来、最悪の被害者を出した。

■ 外通も合同で検問所と警備員

このような状況であるから外国メディアも安全確保を第一に迫られる。NHKの事務所がある街区には、ニューヨーク・タイムズ、BBC、それにロイター、APの両通信社が拠点を置いているが、合同でエリア

の入り口に検問所を設けて警備員を常駐させている。また各社とも爆弾に備えてコンクリートの防護壁を建物の前に設置してあるし、治安担当者雇用して互いに情報交換をしている。

取材も慎重にならざるを得ない。郊外や危険地域には出ない。爆発現場の取材は基本的に避けている。集まった人々を狙う第2の爆発もあるからだ。マリキ首相らの記者会見は、比較的安全なグリーンゾーンで開かれるが、それでも開始の2時間前に集合を求められ、取材中は携帯電話を取り上げられるので、緊急連絡もできなくなる。

そんな中で政権はこの夏、麻痺状態に陥った。スンニ派の閣僚が手を引いた。治安当局がシーア派に支配され、スンニ派住民が不当に拘束されるなど、弾圧されていると非難し、改善を要求している。米国内からは、マリキ首相への不満が噴出して、戦争を始めてサダム政権を倒し、庇護と圧力のもと、新政権を作らせたいのはアメリカではなかったのか？

政治の力で秩序は回復されず、酷暑は終わっても市民の「恐怖」は当面終わりにそうにない。

さいとう・のりひろ 1983年入局 現在ベルリン支局長 7月初旬から約1カ月半バグダッドに滞在

リニア中央新幹線

地元で交差する
期待と疑念

▶ 保阪 有

(山梨日日新聞社)

「未来の高速鉄道」と期待されて久しい超電導リニアモーターカー。その実用化に向け、今春、一つの方向性が示された。山梨リニア実験線の事業主体であるJR東海が、東海道新幹線の代替輸送路として、2025年に首都圏―中京圏でリニアモーターカーの営業運転を始めることを目標にする、と表明したので。

山梨リニア実験線(計42・8キロ)を抱える山梨県の関係者にとって、リニア中央新幹線の早期実現は長年の悲願。同新幹線のルートは実験線をベースに検討されるとみられ、関係者の間では「新幹線整備に道筋が



リニアモーターカーの走行試験が続く都留市の山梨リニア実験線(昨年9月)

つくとともに、県内への駅設置も現実味を帯びてきた」との期待が高まる。

5月、葛西敬之会長らJR東海幹部と面談した横内正明知事も「JR東海の強い意欲と使命感を感じた」と同社の姿勢を評価し、県も同社の目標達成を後押しする意向を示した。

だが、これまでのところ巨額の費用負担のあり方やルートについて具体的な計画はなく、目標達成への見通しは不透明なままだ。国会審議の場でも営業運転の実現に向けて国の後押しを要望する県関係国会議員に対し、国土交通省幹部は「今後の経済、社会の動向、東海道新幹線の輸

送状況、ほかの新幹線の整備状況などを踏まえ、長期的に検討すべき課題」と答弁するにとどまり、JR東海が打ち出した目標を積極的に支援する姿勢はうかがえない。

実験線の地元・都留市の小林義光市長は「JR東海の目標設定で、中央新幹線の実現に弾みがついたのは確か。新幹線も空港もない山梨にリニア新幹線の停車駅ができれば、交流人口の増加がもたらす経済効果は計り知れない」と期待する。

一方で、同社がリニア中央新幹線を「東海道新幹線の代替輸送路」と位置付けていることを踏まえ、「民間主導で計画が進めば、輸送時間の短縮を図るために停車駅の数が最小限に抑えられるなどして、新幹線整備が沿線の地域振興につながらない可能性もある」との不安も口にする。

実験線をめぐっては、同社が2006年9月に3550億円を投じて全線を建設する計画を発表した。13年度末までに先行区間(18・4キロ)の設備を更新し、未着工の一般区間(24・4キロ)を建設。16年度末まで実用レベルの走行試験を行う計画だ。

特に一般区間をめぐっては、大部分の用地買収が完了しながらも

「もうすぐ僕たちもリニアに乗れるの?」。夏休み期間中、都留市の県立リニア見学センターには大勢の小学生らが訪れ、「未来の高速鉄道」に歓声を上げていた。JR東海が営業運転開始の目標とする2025年、この子どもたちは働き盛りの世代になっていく。リニアは山梨に何をもたらすのか。私たちがその時を見据え、息の長い取材を続けたい。

ほさか・ゆう 1998年入社 政経部
富士吉田支社などを経て 2007年5月
から東京支社編集部

一口メモ 山梨リニア実験線と県立リニア
見学センター

山梨リニア実験線は先行区間(大月市―都留市、18.4キロ)と未着工の一般区間(笛吹市―大月市、都留市―上野原市、計24.4キロ)があり、先行区間では1997年から走行試験が行われている。国土交通省の技術評価委員会は判断できる」と評価した。県立リニア見学センターは1997年、都留市小形山にオープンし、走行中の車両を見学できる展望室や車両模型、超電導技術の説明パネルなどを設置。売店ではリニアグッズなども販売している。オープンから今年7月末までに約130万人が訪れた。

「ふみ子の海」は、新潟県の高田盲学校で教鞭をとり、生涯を視覚障害者教育に捧げた粟津キヨさんの少女時代を描いたものである。市川信夫氏原作の同名の小説（1991年児童福祉文化賞受賞）にもとづいた映画化である。

ふみ子にはオーディションで選ばれた鈴木理子。高橋恵子、藤谷美紀

■ふみ子の海



が彼女を支える。

眼が見えなくても読める文字、点字の存在を知り、盲学校への進学を希望するふみ子。女に学問はいらないうという風潮の強い時代、母子に立ち向かうカベは厚かった。

母の苦悩を前にして、あんなまの道を選んだふみ子に試練が振りかかる。つらく厳しい修行。そんな中

で、ふみ子は夢を捨てなかった。

瞳から光を奪われた少女が、ハンディをもとせ前向きに生きる姿を大人たちが温かく見守っていく。母を思うふみ子の気持ち、本当に大切なものは目に見えない。ふみ子が見た海は、きらきら輝いて、運命を切り開いてくれた。いつしかヘレン・ケラーの伝記も読めるようになった。

目に見えない大切なもの

この試写会の帰途、地下鉄の中で思った。昭和のはじめ、日本は貧しかった。貧しさゆえに、瞳から光を奪われた子どもが、小学校の同級生にいた。周りに負担をかけないように、クラスの中で手助けを受けないように、明るくふるまっていたのを覚えている。

日本は豊かになつたけれど、いま海の音は、人間の優しさや、目に見えない大切なものの存在を教えてくれるのだろうか。大きな被害を受けた上越、中越地震の1日も早い復興をお祈りしたい。日本経済新聞出身 川口 章

この映画の収益の一部は新潟中越沖地震の被災者への義援金として寄付されます。
<http://www.fumikonouni.com/> ©CAL

医療保険に入っていない人が国民の6人に1人、5000万人近いという米国の「医療地獄」については、在住歴がある同僚からも話を聞いたことがある。当初、この映画も無保険者を扱ったものと思っていたので、「これは医療保険に入っている人の話」という冒頭のナレーションにまず驚き、見終わった後は、「地獄」

■シッコ SiCKO



の谷の深さのため息が出た。

米国医療の問題点は膨大な無保険者であって、民間とはいえ保険に入っていればいざという時には何とかなる、と思っていたのは、大きな間違いだった。保険会社側の厳しい査定（事務的で無機質で非情な対応は自動車保険を思わせる）で、十分な診療を受けられない若者。自己負担

が払えずに、住み慣れた家売り渡さなければならぬ中年夫婦。「負担能力なし」と病院側に判断されて、ストリートに置き去りにされる高齢者。「これが、われわれの国なのか」というマイケル・ムーアの嘆きももっともで、公的医療保障の大切さを改めて実感した。こういう現実を知ると、日本の医療保険制度は、確かに優れていると思う。

米国「医療地獄」の谷の深さ

ただ、その日本でも、患者の自己負担増、免責制の導入など、医療費抑制の議論が進められている。高齢化に伴って医療費の増加が予想され、主な支え手である現役世代の負担増には限界があることを考えれば、保険給付範囲の見直しや無駄の排除、効率化が欠かせないことは確かだ。だが、行き過ぎるとどうなるか、ということを知っておく必要がある。映画で描かれている米国の実態を、全く違う世界の話としてやり過ぎるのではなく、われわれの身にも起こりうることで考えて、医療制度改革を語る際の参考にした。

読売新聞社会保障部長

小畑 洋一

<http://sicko.jp/>
Sicko ©2007 Dog Eat Dog Films, Inc.

新しいOB会員

情報発信

■市民とジャーナリストを結ぶ集い J C J 賞贈賞式

優れたジャーナリズム活動を顕彰する日本ジャーナリスト会議（J C J）のJ C J賞贈賞式が行われた。50回目となる節目の大賞には熊本日日新聞の「水俣病50年」に関する一連の報道と写真集が選ばれた。ほかの受賞は沖縄タイムス「挑まれる沖縄戦」、共同通信「改憲の系譜」など。（8.11 10階ホール）

照会先：日本ジャーナリスト会議 Tel：03-3291-6475
<http://www.jcj.gr.jp/>

■大河原雅子さんを囲む会

7月の参院選の東京都選挙区で当選した大河原雅子さん（民主党）は国際基督教大学時代、ラグビー部のマネージャーを務めた。同部を中心にOBたちが集い、激励の会を開いた。当クラブ会員では石塚雅彦、鈴木勝利両氏の顔も。（8.24 10階ホール）

■2007Xリーグ記者会見

社会人アメリカンフットボールの「Xリーグ」の開幕（9月5日）を前に、NPO法人日本社会人アメリカンフットボール協会が「Xリーグ東日本」の全日程を発表。出場12チームや選手、今季の見どころなどを説明した。（8.27 10階ホール）

照会先：運営事務局 Tel：03-3490-6611
<http://www.xleague.com/>

マイBOOK マイPR

『金融NPO』

藤井 良広（日本経済新聞出身）

▶新しいお金の流れをつくる 膨大に膨れ上がった世界の富。グローバル金融は、そうしたお金を市場を通じて、“適正配分”するはずだが、現実はどうか。銀行を利用できる人は、世界人口の3分の1しかない。本書は、お金を必要とするところに流すためには、人間の知恵と行動が不可欠であることを、内外の金融NPOの活動を通じて紹介している。欲望が原動力となる営利の金融システムとは別に、人間の創造力を基盤とする「非営利金融」の世界を提示する。

（岩波新書 819円）

バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766
スタンダード・シリーズ

吉 富
カクテル

9月は「小さな竹の橋の下で」

今月はハワイアンです。ジンベースにペパーミントでアレンジした、さわやかなカクテルです。オレンジジュースとバナラアイスシェイクした、吉富さんオリジナルのソフトドリンクもおためしください。



和 食

長月懐石コース (9月28日まで)

菊の花をイメージしてお椀、煮物をこしらえています。栗ご飯もおたのしみください。グラス冷酒つきで5250円です。(板長：薬科浩)

先付：かます羹和え 前菜：無花果のサーモン巻 お椀：菊花帆立 生もの：刺身3点 焼物：甘鯛酢立焼き 煮物：菊花蕪 揚げ物：小芋松茸見立て 食事：栗ご飯 甘味：梨、巨峰

洋 食

ブイヤベースコース (10月9日～11月9日)

マルセイユ風ブイヤベース(伊勢エビ、カサゴ、ホタテ貝入り)のコースです。オードブルの盛り合わせ、サラダ、シャーベットの、コーヒーがついて3360円です。ランチタイムにもお出ししています。(シェフ：黒須修一)

初秋特別コース (10月5日まで)

牛タン・シチューと黒豆のリゾットがメインディッシュです。これに前菜、キノコのスープ、柚子シャーベット、コーヒーがついて2730円です。ランチタイムでも召しあがれます。

<訃報>

小邦宏治会員(毎日新聞出身、67歳)が8月3日、心不全のため死去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

<会員現況> 法人会員 147社 基本会員 811人
個人会員 1,648人 法人・個人賛助会員 70社 176人
特別賛助会員 75人 名誉・功労会員 9人
計 217社 2719人

クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受 付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	URL アドレス
3503-2722	http://www.jnpc.or.jp

会報委員会

委員長＝住田良能
委員＝池谷 忍 石田昭彦 上村幸治 國府一郎
竹居照芳 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり
連絡＝長谷川和子 本庄五月
(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

●ソウルの大学院で教えます●

特別賛助会員のチョン・ウーチュル・アジア開発銀行(ADB)駐日所長が、定年のため9月下旬に退任。10月からソウルの成均館大学大学院でアジア経済の講座を受け持つ。「23年ぶりの韓国での生活はカルチャーショックが心配」という。96年OECDに加盟し先進国に仲間入りしたものの、格差が広がり、若者の間で伝統的な価値観が急速に失われてきている風潮が特に気がかりだ、と。

アジア各国の近年の経済成長にもかかわらず、ADBの最大の目標は貧困削減。「世界の最貧者(1日1ドル以下)の3分の2はいまもアジア・太平洋地域にいる。インフラや環境分野などのプロジェクトを通じ生活向上に取り組むADBのマンデートは変わらない」。後任は近々着任予定。(石川)

取材証があたりくなりました

3年に1度更新している「日本記者クラブ取材証」を、法人会員各社から登録のあった取扱担当者にお送りしました。新しい取材証の色はライトグレーです。

会員は顔写真入りの「会員証」がクラブ利用の際のIDになりますが、各社の非会員の方はこの取材証をIDとして携行していただければ、クラブ施設を利用できます。

地方紙・地方局は東京支社で管理していただいておりますので、有効にお使いください。

■法人会員代表変更

▼日本繊維新聞社 古橋温夫代表取締役社長(旧・松崎祐三氏) ▼福島民友新聞社 村西敬生代表取締役社長(旧・伊佐早幸男氏) ▼愛媛新聞社 野本武男代表取締役社長(旧・牧野隆史氏) ▼テレビ大阪 上田克己代表取締役社長(旧・富澤秀機氏) ▼熊本放送 笠日出臣代表取締役社長(旧・永田幹郎氏) ▼テレビ熊本 鍋田達男東京支社長(旧・吉岡精一氏) ▼NHK情報ネットワーク 平田哲代表取締役社長(旧・宮本克彦氏)

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

「会見速記録」：8月の新規掲載

- 参院選7党党首討論会(2007.7.11) ●船橋洋一朝日新聞コラムニスト「朝鮮半島の『クエスチョンズ』を追及して」(2007.4.23) ●井上ひさし氏「普通のことばでどれだけ人生の底に届くか」(1986.5.26) ●王貞治選手「鍛え抜かれた自然体」(1977.10.13)

今後の行事予定 (9/3現在)

- 9.18(火) 15:00～16:30 (10階ホール)
シリーズ研究会「中国」⑦
金子秀敏・毎日新聞論説室専門編集委員
- 9.19(水) 15:00～16:30 (10階ホール)
研究会「日本の難民・外国人受け入れ政策」①
滝澤三郎 国連難民高等弁務官事務所駐日代表
- 9.21(金) 15:00～16:30 (10階ホール)
研究会「日本の難民・外国人受け入れ政策」②
坂中英徳 元東京入国管理局長

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテーブルでお知らせしています。

写真回廊

撮影 上間 孝司 (日本経済新聞 写真部)



約100種類の試供品を配布する専門店が渋谷にオープン
20~30代女性を中心に連日にぎわいをみせている

行列に潜む魔性

人間とは列を作る生き物。そして、行列は時に異常を来たす恐ろしさを秘めた現象でもある。先日那覇空港での中華航空機炎上事故で、緊急脱出口に出来た乗客の列はよく恐怖に耐えたもの。火に追われつつ脱出した160余人の心境はいかばかりだったか。

それにつけても、近年気掛かりでならないのは、人気の高層ビル内に増えた「一列縦隊」式のエスカレーターと、その上の長蛇の列である。先日、東京都心の「東京国際フォーラム」「六本木ヒルズ」「東京ミッドタウン」をあらためて巡回したら、ある、ある、あちこちにその「一列式」が。この長くて狭い、動く階段で、もしも子どもや老人が転んだら…。

この3箇所以外の公共施設にも「一列式」の危険はあるだろう。ビルの安全管理者や監督官庁は今の「緊急停止ボタン」と「転ばぬように」などの注意だけで万全なのか、再点検して欲しい。それに、万が一の事故に備える安全装置、「フェイルセーフ」の基本に従えば、エスカレーターは2人が左右に並べる「二列式」がやはり安全では、と思うのだが、建築家たちはどう考えるのか。私の心配が取り越し苦勞なのか、読者の意見も聞きたい。

上の写真は最近東京に現れた試供品配布の専門店での客の列。平穩を表す洒落たシルエツトだが、「行列」の裏にはパニックに通ずる魔性が潜んでいることもお忘れなく。

(伊藤 三郎)